

四谷校地時代の学習院

明治10年(1877)神田錦町に開校した学習院は、同19年の火災によりその校舎を焼失し、同21年に旧工部大学の敷地である虎ノ門に移転する。しかし、その位置や建物などに教育上不便な面があること、修繕に多額の費用がかかること、今度は赤坂離宮の隣の四谷区尾張町および仲町の御料地に校舎が新築されることとなった。新校舎の建築は同22年9月に着手され、翌年8月に完成。9月11日に始業式が挙行された。

三浦梧楼院長の改革

当時第4代院長を務めていた三浦梧楼は、四谷の新校舎建築に終わったほか、多くの教育体制の改革を行い、諸制度と組織の整備を進めていった。

明治22年(1889)2月11日、憲法発布と同時に貴族院令が公布され、華族は新たに政治上の特権と義務を与えられることとなり、華族子弟の教育がより重要視されるようになった。また、同年7月10日の学習院卒業証書授与式に、「学習院は平素から生徒の軍務に服するの志操を養成し、陸海軍学校へ進む素地をつくるように」との沙汰があった。こうした状況下で、三浦はこれまで学習院の諸規則が院長の替わるたびに変更されてきたことを遺憾に思い、確固とした教育方針を確立させるため、従来の「学習院規則」および学科課程を廃し、同23年7月28日、新たに「学習院学則」を制定したのである(同年9月1日施行)。

その第一章総則第一条に「学習院ハ専ラ天皇陛下ノ聖旨ニ基キ華族ノ男子ニ華族ニ相当セル教育ヲ施ス所トス」と、学習院の教育目的が示された。第二条に学科は初等学科(満6-12歳)・中等学科(満12-18歳)・高等学科(満18-21歳)・別科(満21-24歳)・海軍予科(満15-18歳)の五種に定められた。学科の諸課目は、国漢文・数学・理学・芸術・欧文・歴史地理・政学・法学・哲学・武課の十種に分けられ、各教課を通じて道徳・知力・気品・体力の養成が期された。道徳については修身・倫理等の課目を設けず諸課目においてその涵養が図られ、こうした教育方針にあわせて、学習院独自の教科書『学習院初学教本』が編纂されたほか、習字・外国語・図画など各種の教科書が刊行されていった。また、学習院の教学の基準を示すものとして天皇の勅語などを集めた『教学聖訓』が全教職員・学生に配布された。

●三浦院長の改革

- 学習院学則の制定
- 教科書および『教学聖訓』の編纂
- 学習院官制・服務細則の制定および
教員会・評議会の設置
- 学生心得・寄宿舎規則等の整理・改定
- 四谷区尾張町の新校舎建築
- 輔仁会の創設

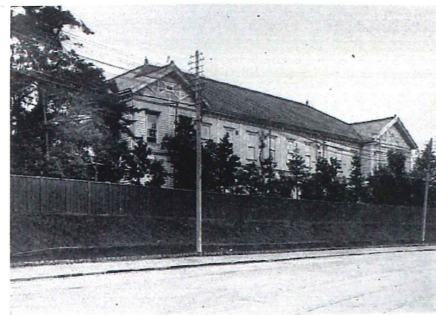
四谷の校地

明治22年(1889)、虎ノ門から旧華族女学校のあった四谷区尾張町への移転が決まると、新校舎の建築が始まった。四谷への移転は翌年の9月3日に完了し、通学に不便であった本所・深川・浅草・下谷に住む初等学科生のために帝国博物館附属地に建つ華族会館所有の建物を使用した上野分校とともに、11日に授業が開始されている。

四谷校地の総面積は2万437坪(約6万7560㎡)で、渡辺讓の設計による煉瓦造りの二階建ての本館のほか、寄宿舎・柔道教場・厩・柔軟体操場・幼年学生運動場・青年学生練兵場・植物園・馬場があった。本館は、正堂や図書館、初等・中等・高等学科の各学年の教室や、博物・図画・習字・唱歌教室など多くの教場があり、同27年の地震の被害を受けるまで使用された。



幼年寄宿舎(学習院アーカイブズ蔵)



青年寄宿舎(学習院アーカイブズ蔵)



四谷の学習院本館(学習院アーカイブズ蔵)

同25年3月の三浦退任後、爵位局長兼侍従職幹事であった岩倉具定が院長を兼任するも、10月には田中光顕が院長に就任した。田中は高等学科修了後、さらに専門的な学術を修めようとする学生のために設けられた別科を大学科と改称する。その第1回卒業生を出すにあたり、同27年には帝国大学に次いで学習院においても学士号が授与できるよう学則を改正、7月卒業の大学生3名が初の学習院学士となった。

近衛篤磨院長による外交官育成

次いで、明治28年(1895)第7代院長となった近衛篤磨も、就任直後から学習院改革に取り組み、華族が従事すべき職務として、貴族院議員と陸海軍の武官のほか外交官をあげ、その人材育成に尽くすべく、翌29年に大学科と高等学科の教課課程を改正した。欧文課の授業時間を増やすなど語学に重点をおき、のちに初等学科や中等学科の課程も改正している。

この改正により、教員の確保が困難なことから正規の課程が一時中止されていた大学科が復旧、同31年9月の授業開始に向けて教員の確保が求められた。専任の教員を養成するため、教授らを留学させ、また、学生を広く一般から募集した。しかし、高等学科卒業生は帝国大学に入学する者も多く、学生数は期待通りに増えず、さらに、同37年1月に近衛が病没したことから、授業開始の7年後である同38年に大学科は廃止となった。

再びの校地移転

四谷に移転した4年後の明治27年(1894)6月20日、明治東京地震が発生。本館の建物に亀裂が入り、使用不可となったことから、その後の授業は寄宿舎で行われることになった。そのため学生の寄宿は停止され、校舎近くの民家一軒を借りて仮寄宿所が設けられたほか(同30年7月閉鎖)、公的な寄宿舎とは別に教官が学生を自宅に寄宿させる例がみられ、近衛院長の命により同30年から四谷区愛住町に個人的な小寄宿舎「主一館」も開かれた(近衛死去後に閉鎖)。また、本館2階にある正堂も被害を受けたため、地震以後の卒業証書授与式は赤坂離宮を借用して行われている。

本館校舎は基礎造りが不完全で、修理をしてもそのまま使用するのは危険であること、民家が接近して火災や流行病のおそれがあることなどから校舎の移転が提起された。田中院長による富士山麓、大森移転案、近衛院長による小田原移転案があるも、戦争による中断や反対する者も多くいずれも廃案となった。最終的に近衛による北豊島郡高田村(目白)移転案が裁定され、同30年に新校舎建築が決まるも、財政上の問題もあり、中等・高等学科の移転が完了したのは同41年8月のことであった。なお、初等学科は移転案が市外だったこともあり、四谷校地の西南隅(仲町第二御料地)に校舎を新築することとなり、同32年7月に学習院正堂とともに新校舎が完成した。

(助教 谷嶋美和乃)

四谷時代の 歴代院長

何代目 名前(生没年)
在任期間(M=明治、T=大正)
爵位 就任時の官職



4代 三浦梧楼(1847-1926)
M21.11.5 - M25.3.26
子爵 陸軍中将



5代 岩倉具定(1852-1910)
M25.3.26 - M25.10.20
公爵 爵位局長兼侍従職幹事



6代 田中光顕(1843-1939)
M25.10.20 - M28.3.19
伯爵 宮中顧問官兼帝室会計審査局長



7代 近衛篤磨(1863-1904)
M28.3.19 - M37.1.2
公爵 貴族院仮議長



8代 菊池大麓(1855-1917)
M37.8.4 - M38.10.12
男爵 文部大臣



9代 山口銳之助(1862-1945)
M39.1.18 - M40.1.31
学習院長事務取扱



10代 乃木希典(1849-1912)
M40.1.31 - T元.9.13
伯爵 軍事参謀官

